

私の中に流れるもの

チャウ ファム ウェン ビン

私は中国人の父とベトナム人の母の間に生まれました。そのため、学校の同級生や近所の人からいじめられたり差別されたりすることもあった。だから、自分は完全にベトナム人ではないと思ひ、国に対して愛着があったとは言えない。また、学校でベトナムの戦いの歴史を習っても、それは教科書の中の知識に過ぎず、平和のための犠牲の重みを感じることもできなかつた。

しかしある日、私は母からある話を聞いた。その話は、戦争から逃げ惑うある家族の話で、実際にあったことだ。それはこんな話だ。

医師であるナムという男性と、妊娠中の妻のランは幼い娘を連れて、銃声が鳴り響く中を逃げた。木々の生い茂る森を逃げる途中、助けを求める人がうめき声をあげていたが、ナムはどうすることもできなかつた。過酷な避難の中で、食料も水もなく体力も気力

も尽き、ランは流産をしてしまった。そして、  
家族三人が生き延びるために、ナムとランは  
その流産した赤ん坊を食べざるを得なかった。  
彼らの過酷な逃避は続いた。しかし、とうと  
う敵に捕まってしまう、ナムはひどい拷問を  
受けた。そして、ナムは敵のために医師とし  
て働くことを条件に妻と娘を逃がしてもらっ  
た。その後、ナムは妻と娘の無事を祈りつつ、  
休むことなくひたすら敵の兵士たちを治療し  
た。見捨てた人たちのこと、食べてしまった  
赤ん坊のことが脳裏から離れず、良心の呵責  
と罪悪感に苦しみながら、犠牲となった。  
私は母からこの話を聞いて、感情が非常に  
揺さぶられた。戦争というものは、生き延び  
るために、自分の限界を越えて倫理や道徳と  
いうものを捨てざるを得ない状況に直面する  
のだ。物理的なものだけだけでなく、精神的も破  
壊して「無」にならなければ生きられない。  
そんな人が数多くいたのだ。母はこの話を祖  
母から聞いたという。歴史の知識として文字

で知るのではなく、その時代を生きてきた母  
や祖母から話を聞いたことは、それまでの未  
熟で短絡的な考えを見直すきっかけになった。  
かつこの世代が、戦争を生き延びるために  
どれほど苦しみ、耐え、現在の社会倫理基準  
を越える行動を取らなければならなかったか  
国の独立を勝ち取るための戦いに思いを馳せ  
ると胸が苦しくなる。母からの話は、国に無  
関心だった私を、ベトナムという国を愛する  
者へと変えたと言っても過言ではない。  
ベトナムは長年におたって、独立のための  
戦いを続けてきたため、実はこのような話が  
いくつもある。爆撃から逃れるために地下室  
に隠れ、子供の泣き声で敵に見つからないよ  
うに生き埋めにするしかなかった母親の話、  
亡くなった両親を供養するために、戦場に香  
炉を持ち込んだ若い兵士たちの話もある。戦  
場の後方では、少年少女が小さな自転車で325  
キロもの食料を運んでいたそうだった。当時は靴  
もなく、みんなゴムタイヤから作ったサンダ

ルを履き、戦場で砲撃に立ち向かっていったこと  
ともあった。20代の若い兵士たちは、その青春時代のほとんどを戦場で過ごし、塩の味や米の形も知らずに戦っていた。砲撃が空一面の花火のように見える時には、100万人以上の人が犠牲となったが、遺体の多くはバラバラになり、彼らの骨と血はベトナムの大地や川に溶け込んでいる。

独立を得た今の時代に生まれた私は、多くの人の犠牲の上に平和を享受している。私の中にも不屈のベトナム人の血が流れていることを誇りに思うべきだと次第に思うようになった。また、日常を過ごす中で、今の私とかつてのベトナムの人々は、別の次元にいるのではなく、彼らの過ごした時間の流れの先に生きているのだと気づき始めた。

小さい頃、私は田舎の道端で摘んだ草から作ったスープが大好きだった。あとで、戦時中、監禁され拷問されていた人々は敵に情報を渡せば食事がもらえるを知りつつも決して

仲間を裏切らず、その草を食べて飢えをしのいでいたと知った。また、ある日家族と山登りに行った時、私は草むらの土を掘ろうとした。それを見て、祖母は「やめなさい、それは戦死した兵士のお墓かもしれない。不敬だよ」と言った。私は亡くなった人がそこにいることを怖いとは思わず、そこに独立のために尊い犠牲を払った人々がいることに、なんととも言えない温かい気持ちになった。

私たちが今、独立した平和を享受できるのは、前世代のおかげだ。そう思えるようになったおかげで、私は日本で学ぶことを決意した。日本のような発展した国の知識を学び、独立して76年になるベトナムの発展に貢献することが私の目標だ。国を誇りに思い、愛国心を持つことは、私の中の軸をしっかりと持つという意味で重要だと思う。多くの人の歩みの上に国があり、国があるからこそ私は存在している、今は強く思える。